

世阿弥の頃の佐渡

皆さんは、今年の夏（平成九年七月）世阿弥の碑が佐渡博物館前に建てられるのをご存知でしょうか。今日はそのことに因んで、能楽師、世阿弥のことや彼が配流された頃の佐渡についてお話ししてみようと思えます。

世阿弥（観世元清）が將軍足利義満の庇護を受け、六代將軍義教からは迫害されて佐渡へ流されたのは、今から五六〇年前、一四三四年のことです。ときに世阿弥七十二歳。

このようにはっきりわかったきっかけは、世阿弥の書いた『金島書』が吉田東伍（歴史学者、越後生まれ）によって発見され、明治四十二年に世に出たからであります。

私どもは、世阿弥が佐渡へ流罪者となっていたことを知って驚き、「島でどのような生活を送ったのだろうか」について関心をもちます。

世阿弥といいますと、私どもは能楽界の元祖として、親鸞などと共に名僧知識、つまり何者かわからないうが非常に偉い人という目でみている場合が多いんですけれども、完成した後の世阿弥をみるのではなく、人間世阿弥をみるべきであるという風潮の高まりの中で、世阿弥が辿った道について、色々のことが明らかにされてまいりました。

『金島書』が世に出るからは、世阿弥も親鸞も名僧知識などではなく、河原者とか貧しいお寺さん、という話になり、そのことと生きざまに関心をもたれるようになりました。

世阿弥の場合、父の観阿弥と一緒に奈良の興福寺で能を舞っていたところを、貴族が見物していて、演能中に声をかけて銭を投げるんです。観阿弥父子は舞いを止めてその銭を拾う。そういう面から見ると、確かに河原乞食であったといえましょう。

ところで佐渡の書物を調べてみますと、『金島書』が発見される以前に佐渡の郷土史には観阿弥が佐渡に配流になったことが記されています。それが事実だとしますと、世阿弥の影響を受けた島の古老達が何百年にもわたってそのことを語り伝えてきた賜物である、という点で大変興味深いことだと思えます。こ

んど佐渡高校から『佐渡名勝志』という本が出版されましたが、その中の金井町泉の正法寺しやほふじの項に「観世太夫（観世流の親玉のこと）が佐渡へ流されてきて、この寺の境内に「腰掛石」が残っている」という意味のことが記されております。

この本を書いたのは佐渡人ではなく、千葉の伊東隆敬という人です。佐渡の古代から江戸時代までの行政や風俗、社寺、文学などのあらゆる分野にわたって書いた郷土史なんです。およそ二五〇年も昔に、観世太夫の佐渡配流について書かれていたのですから驚かざるをえません。

といっても、この書物は一般の人の眼に触れることはありませんので、昭和になりましたから橋なはせ正隆まさたか（越後生まれ）が佐渡に住み、注を入れた『佐渡名勝志』を刊行して初めて私もはその事実を知ることになります。

ですから観世太夫については『金島書』で教えられる前に知り得たわけです。しかし、それが残念だと申し上げているではありません。私どもの関心事が多少移ってきたことを示していて、大変面白いと思います。

さて、佐渡で能楽が盛んであることはご承知のとおりですが、それは世阿弥が佐渡配流になったからではありません。大久保長安おおくぼながやすという人が慶長八年（一六〇三）に佐渡の国代官として赴任します。書物によっては佐渡奉行と書いてあるものもありますが、国代官は奉行よりも位が上で、偉いんです。長安のあと初代奉行となったのは鎮目市左衛門ちんめ。長安も鎮目も山梨県の人です。

長安は九年間佐渡で代官を務めました。着任するや、相川の春日神社を皮切りにあちらこちらに神社を建てたんです。そこで長安が連れてきた二人の能師（常太夫と杵太夫）に能を舞わせます。今は芸能で能を舞うといいますが、当時は鉦山の繁栄と航海の安全を祈って神様に能を奉納したのです。長安が能に関心を抱いたのは、父親が猿楽師だったからでありましょう。長安自身もまた或る時期猿楽師だったことはありますけれども、大体は鉦山師でしたから、能についてはあまり能がなかったのだらうと思えます。

大久保長安が代官として手腕をふるいはじめた頃、相川鉦山で大金を握っており、大山師の田中宗徳で、小浜（若狭）の商人でした。宗徳にはお花（ハナ）という娘がいて、長安はお花を細君に迎えます。そのお花が能師から能を習い始めるのです。それは本格的な能ではなくて、酒を飲む時に舞う能、つまり小舞であります。

そういえば佐渡の人間はみんな少し謡を嗜みます。馬方までも「高砂」ぐらいは謡いますけれども、よく知っとるかというところ、そうではないんです。祝い謡とか肴うたい、それ一曲しか知らないといった程度です。

潟上の本間英孝さん（佐渡宝生流本間家当主）が折にふれておっしゃいます。

「佐渡の人間つうのは実に困る。直ぐ俺んところへ来て、ちょっと能を教えて一ぺん舞わしてくれ。そんなこというもんじゃねえのに……」と。

このような軽い形で能が村人たちの間に根を下ろしていったのでしよう。

佐渡の能舞台は、春日神社の神事として始められたために、大体神社についております。お寺に舞台があったのは畑野の玉林寺だけでしたが、これも維持費がかかるということで平成七年に解体されました。因みに現在、佐渡に能舞台は三十三あります。

昔、神社に能舞台を作ったのは村の金持ちでありまして、村人に舞いを見せようために能を催す。見物するときは、神社の庭にゴザを敷いて、ふるまわれた酒のみ、重箱をつつきながら見るわけでありませう。なぜそうするかと言いますと、（お腹が空いたという人もおるだろうけども）それがしきたりだったので。それにしても食事をしながら見物する光景というのは、あまり神々しくはないんであります。

親戚の叔父さんなんかが出る時には、「仕方ねえけも、行かんならんねえ」とか「顔立てならんねえ」といって、気乗りしなくても出掛けて行きます。招く側も、仕方なしに来た連中を前に、「今日は遠い所をよう来てくれて……」などと口上を述べて舞い始めます。

現在金井の中興には能楽堂（昭和六十二年建立）がありますが、観る場所はやはり庭。これが興福寺以

来の伝統であります。

さて、『金島書』のことで少し申し述べておきたいことがあります。佐渡へお帰りになられたような時に、正法寺や長谷寺を訪ねられるのがよろしいかと思えます。

『金島書』は何篇かに分かれておりまして、事細かに申し上げることは止めますが、世阿弥の最後の配所となった泉の正法寺に辿り着き、そこで老いの日を過ごすまでの心境がまるで小謡のようにつづられている。

一四三四年五月四日に都を出て、翌日若狭の小浜に着きます。そこから舟で佐渡へ向かいましたから、能登の岬を過ぎる時には海は穏やかで、遙か東の空には白山（加賀）の峰が光って見えたことでありましたよう。

こうして世阿弥は松ヶ崎の多田に着きます。多くの流人や旅人がそうしたように世阿弥もその夜は多田に泊り、明くる朝、小佐渡山脈を越える。どういう風に越えたかについては色々な説がありますが、佐渡農業高校で教鞭をとられた本間雅彦先生は、歩いたルートについて書いておられる。

畑野に飯出山という山があります。この辺りまで来ますと、多田を発った旅人たちは早い昼食を摂る。公に昼食を出す場所というのが山名の由来でありまして、このような所は諸国に少なからずありました。飯出山といっても、山の頂上に休み処が作られていたのではなく、山の近くの峠道にあったのです。

世阿弥は畑野町の長谷にある長谷寺に参詣している。正面の石段を登りつめたところに観音堂があり、世阿弥が訪れた頃に建立されたものです。その観音堂の前に立つ樹齡千年とも伝えられる三本杉も健在で、時の流れを見つめているかのようであります。また、辺りのたたずまいが奈良の長谷寺に似せてあって、大きな柱以外はつづくってありますけれど、当時のものが今なお使われており往時が偲ばれます。

世阿弥が拝んだご本尊の十一面観音立像も現存している。三十三年に一度だけ開帳といわれる秘仏です。今、今は観音堂の裏の収蔵庫に保管されていて触れることは出来ません。前回は昭和五十九年にご開帳がありました。

帳がありました。

さて、世阿弥は夕方、国の守の代官に引きとられて新保の万福寺という小さな寺に住むことになりました。万福寺はすでに廃寺となっていて今はありませんが、『金島書』には当時の寺のたたずまいが詩情豊かに綴られています。

へこの寺の有様、うしろには巖松むらだちて、来ぬ秋さそう山風の、庭のこずえにをとずれて、かげは涼しきやり水の、苔を伝いて岩垣の、露もしずくもなめらかにて、まことに星霜ふりけるありさまなり。……

その寺跡は現在の金井町役場の辺りにあったらうと思われます。

ここで少し国の守の代官について申し上げておきますと、国の守とは守護のことです。頼朝の後北条政権が出来て、佐渡は北条氏の領地となり、北条氏が佐渡の守護をつとめるわけです。

資料に現れるところでは、「比企北条」あるいは「大仏北条」と呼ばれる人です。埼玉県比企郡川島町には、今もその末裔がおられる。もともと埼玉の出身ですが、厚木に住み佐渡の守護となつてからは「連署」といって大変重要な役職についておりました。今でいえば、高級官僚といったところでしょう。そこで北条氏はどうするかといいますと、佐渡の土地を自分の家来に与えて村長にする。そしてその土地の税金を徴収させるのであります。これを地頭職じとうしやくと与えるといひまして、その恩恵を受けた主な人たちが、本間、土屋、藍原、渋谷の各氏であります。とりわけ地頭職を一番多く持っていたのが本間氏であつて、彼が守護代となります。（守護については、「佐渡の中世―日蓮上人配流とその周辺―」で詳しくお話ししましたから、ご参照下さい）

話を戻しまして、世阿弥の配所となつた新保ですが、「保」というのは平安時代の開墾地のことです。「新保」は国有地を国衙くわが（国の機関）が佐渡の人を使って開発させた場所という意味です。中世の頃、この辺り一帯が国の守の所領で、新保城がありました。真北にそびえる金北山から流れ出す水を寄せ

集めて流れる川が通称「新保川」であります。万福寺跡といわれる金井町役場の辺りは、現在大字千種ちぐさですが、私どもは尾花おびなと呼んでおります。

尾花は、明治の初めまでは野原や田圃で、明治二十年代に初めて熊野神社の下に饅頭を売る小屋ができて、それからポツポツと家が建つようになったのです。その新保で世阿弥は代官に引き渡されたことになりません。

「新保」といえば思い出すことがあります。昔、新穂に大変郷土愛に満ちた羽田清次先生がおられました。先生は「しんぼ」というのは「新保」ではなくて、「新穂」のことだと話されました。つまり、もともと新穂辺りが「しんぼ」だったのに新穂を「にいぼ」と読みちがえてしまったために生じた間違いであるとお考えのようでした。かつて根本寺の隣に本間六郎左衛門という人の家がありましたが、先生はそこが日蓮が流された頃の守護代、本間六郎左衛門の守護所であると信じておられました。しかし先生の説には少しムリがあるかと思われませう。

確かに読み間違いや聴き違いのまま定着する例は、ときたま起ります。例えば、両津から金井へ行くところに「貝喰川」があつて、（かいばみがわ）と読むのが正しいのですが、戦後、ある市役所職員が（かいくいがわ）と読んでしまった。また「ドンデン山」の「ドンデン」もそうです。昔、海府の田圃を開発した折に田圃の所有権をめぐる争いが起きた。これを論田（ろんでん）といいます。昔、海府の田圃を開発聴いてしまった。佐渡の人にとっては「ラ行」と「ダ行」の発音の区別が難しく、佐渡ならでは間違いと言えましょう。もう一つ、私どもは「国府川」を（こうのかわ）と読みますけれども、現在、新潟交通では（こくぶがわ）と読ませている。これは（こうのかわ）または（こうのがわ）が正解であります。

さて、世阿弥は『金島書』の中で（万福寺のご本尊は薬師如来である……）と書いている。先程申しました長谷寺の観音さまもそうですが、古仏というのは信仰圏を持っております。新しく村にできるお寺は、その村の人だけが檀家ですけれども、古いお寺では檀家の範囲が大変広い。神社も然りです。

皆さんは、お寺は村の戸数に応じて平等に分布するものだとお考えでしょうが、そうではないのです。

皆さんは、お寺は村の戸数に応じて平等に分布するものだとお考えでしょうが、そうではないのです。

新保（東方）には三百軒ほど家がありますが、お寺は一ヶ寺です。ところが大和田西方（本屋敷、中興、尾花崎、西方の地区）には十四のお寺があつて、全部大和田薬師の傘下にはいつております。東方には一つだけ。大慶寺（現金井町近藤浄太町長が住職。かつて山伏から住職に転身したところ）があります。もつとも西方とは寺社方のことで、東方とは武家方という決まりがあるからでしょうが。大和田薬師は西方にあります。

因みに「大和田薬師がどの辺りに田圃を持っていたか」を調べてみますと、今の金井町役場のところであつて、それが大洪水のためにさらに上の方、台地上へ移ることになります。本屋敷という所に熊野神社があります、その神社の神主が本間氏でありまして、神社は昔、役場の西の方にあり、この方が、守護代から世阿弥を預かった人物の子孫ではなからうか、と思います。その本間氏の下で活躍していた人が浅島という今の整骨医です。その医師は、役場辺りの土地の地主でありまして、浅島一族が大和田薬師の氏子として大変活躍しておりました。世阿弥が拝詣したご本尊のある薬師堂は、今も金北山の真南にあたる大和田の里に残っています。

やがて新保一帯に争い事が起り、穏やかならざる日々が続いたので、世阿弥は一四三四年の秋、和泉の禅宗・正法寺の界限に配所を移したのです。

『金鳥書』を読んでみますと、万福寺から眺められる八幡や和泉の光景が記されています。

へさて西の方を見れば、入海の浪白砂雪を帯びてみな白妙に見えたる中に、松林一むら見えてまことに春六月の景色なるべし。この内にまします八幡宮の靈祠なり、されば所をも八幡と申。……また西の山本を見れば、人家豊を並べ都と見えたり、泉と申すところなり。く

なるほど金井町役場の屋上へ上がつて西を眺めますと、八幡の松林が、（だいぶ松喰虫で枯れましたけれども）今もつて見えます。泉という部落も（今は国道よりも北側になりますが、昔は今の泉の沖にあつ



た)たしかに見えてまいります。

八幡は、京極為兼という『玉葉集』の撰者が流された時の配所でありまして、世阿弥はその八幡を訪ねている。更に順徳上皇の配所となった和泉の地も訪れている。上皇は真野か八幡辺りに住まわれたと思われていたのですが、『金島書』によって「泉」であることがわかったのです。

ところが、この書物が発見された明治四十二年には既に順徳上皇陵が真野に出来上がっておりました。一般に「真野御陵」と呼ばれる所ですが、正式には上皇の遺骨は火葬にして京都の大原に移され、大原御陵に収められていましたから、京都所司代からクレームがついた。そこで「真野御陵」の方は、遺骨した所つまり火葬塚が妥当であろうということから、「順徳上皇御火葬塚」という名称が与えられたわけがあります。もともと田圃であった所を買い上げ、地ならしをして松の木を植えて作ったのです。上皇の仮の住いだったと伝えられる「黒木御所」も明治になって作られたものです。有志の方々が集まって、公有地を清掃して、火葬塚を作り木を植えたのであります。

いろいろ調べてみますと、私どもの知らない問題点が沢山出てまいります。

七十二歳の世阿弥は、最後の配所となった泉の正法寺で何を思い、どれほどの月日を過ごしたのだろうか。いつ許されて都に戻されたのか、或いは許されることがなかったのか、正法寺以降、世阿弥の足跡は全く辿ることはできないのです。『金島書』の奥書が一四三六年(永享八年)となっておりまますから、彼はその年に許されて都に戻されたのかもしれない。

確かなことは、世阿弥が佐渡から娘婿の金春禅竹に出した一通の手紙が残されていることとあります。その手紙には、配流のあと妻の寿椿がお世話になっていることや、お金(十貫文)が送られてきたお陰で島での暮らしに支障なく、人目も外聞も保たれていることへの感謝の気持が込められています。

手紙は奈良の宝山寺に所蔵されておりますが、佐渡博物館前の「世阿弥の碑」にも同文が刻まれています。機会がありましたら、御覧になって下さい。